

作品タイトル：『シソウノウロウ』

公開可能な著者名：水絹望音

本編文字数：3,901文字

あらすじ：

ある日、詞藻濃漏と診断される。建前で美しい言葉を繰り返していたのが原因らしい。私は医師の指示に従い、とにかく黙るという治療を実行する。部下の書類の添削を通して、部下の特性を理解した私は、適材適所の仕事を部下に割り振ることができるようになり、課の営業成績は過去最高を記録する。

「シソウノウロウですね」

「ああ、やっぱり」

「やっぱり？」

何でもないです、と手を振りかけるが、やはり伝えておくべきか。

「私は、とある営業企画課の課長をしているのですが」

あれは、ひと月ほど前か。部下が鼻声になった。ひとりふたりじゃない。全員だ。

「最初は部下の体調を気遣っていたんです。無理をするんじゃないぞ、と」

ちょっとした体調不良。そして、体調不良がミスを助長してしまうことは誰にでもある。

しかし、それを差し引いても部下のミスは目立った。私の指示を何一つ理解しておらず、再三提出される書類には、改善の痕跡すら見られない。

「怒鳴ろうかとも思いましたよ。でも、それだと部下はついてこないですし、そもそもパワハラですから。そうなればと、ミスを繰り返す部下を励ましてみたんです」

部下のデスクに近寄り、声をかける。部下は、あ、という口をした。

「この書類、やり直した。でも、聞いてほしい。君に成長してほしいからこそ、こうして注意をしているんだ。君はいずれ会社を引っ張っていく期待の星だ。そんなことを部下に言ったと思います」

部下はぎゅんっと奇声を発し、白目を剥いて気絶した。そのあまりにコントじみた光景を思い出し、頭を抱える。

はあ。

医師は手元のカルテに筆を走らせた。

「私の息、臭いんですかね？」

「失礼ながら、臭いんでしょうね」

「人が気絶するほどにですか？」

「人が気絶するほどになんでしょうね」

はあ。人が気絶するほどの口臭。そりゃあ、指示が通らないわけだ。

カルテが、ちらっと目に入る。詞藻膿漏。

「それ、なんて読むんですか？」

「シソウノウロウです」

「歯槽膿漏ですよ。歯ですよ、歯。なんですか詞藻って」

「詞藻は、『美しく飾り付けた言葉』とでも言いましょか。あなたは、そんな言葉を建前で繰り返していたから、膿んでしまったんですよ。いわゆる美辞麗句ですね。管理職の方に多いんですよ」

「はあ。つまり、歯垢の塊が原因となる、あの歯槽膿漏ではないわけですね？」

「まあ、思考の固まりは一つの原因とは言えますが」

「すると、部下が気絶したのは、私の口臭が原因だったわけではないんですね？」

「口臭というか。まあ、臭かったには違いありませんが。今の若い人は特に敏感ですからね」

ふと、先ほど医師が言った「建前で」という言葉を思い出す。

「私は建前ではなく、本音で部下を励ましたんですよ」

「そうですか。わかりました。では、その部下のことを話してみてください。これまでの実績や、長所、短所などを」

失神した部下のことを思い出す。彼は法人向けの営業を担当していたか。いや、それは別の部下だ。彼は、あれか……。なんだっけ。

「ほら、その部下が何の仕事していたのかもわからないじゃないですか。まさか、名前は流石に把握していますよね」

流石に名前は、と思うが、医師からの妙なプレッシャーを受け、ど忘れしてしまった。

医師は、はあ、とため息をついた。

「君は期待の星だなんて、美しい言葉です。信頼できる上司に言われたら、こんなに嬉しいことはないのかもしれない。しかしね、部下の名前すら把握していない上司に言われたら、臭くって聞けたもんじゃないですよ」

ぐうの音も出ない。

「治るんでしょうか？」

医師はピースサインをした。

「治療法は二つあります。一つ目は、常に本音話すこと。二つ目は、とにかく黙ること。当院では、とにかく黙ることをおすすめしています」

「それはなぜです」

「そっちの方が簡単だからです」

「働く身としては簡単ではないです。営業ですよ。本音を話せばいいんですよ。それならできそうです」

「はあ。いいですか。あなたはもう、建前と本音の区別もついていないんですよ」

医師は人差し指を立て、目の前に突き出した。

「とにかく黙って経過を見ましょう。黙ってと言っても、相槌や短い言葉くらいなら大丈夫です。それくらいなら、部下の方は息を止めていられるでしょうから」

「課長、A社の業績分析の資料です」

「課長、明後日のプレゼン資料です」

「課長、個人向け新サービスの企画書です」

ざっと書類も目を通す。どの書類も前に指摘したところが直っていない。部下をぎろりと睨み、大きく息を吸う。

とにかく黙って経過を見ましょう――。

そのまま息を飲み、頷く。部下は、それを肯定的なサインと受け取ったのか、安心した表情で自席に戻った。

後で私が直せばいい。そう安易に考えていた。しかし、やがて手がまわらなくなり、私は部下の資料に目を通さなくなった。

ある日、部長と階段でばったり会った。

「お、偶然だな」

部長は、偶然を装っている。

「最近困ったことが二つあったんだ。聞いてくれるか」

「はい」

「一つ目は、ひとりの顧客に対して個人営業課の者と、法人営業課の者が重複して営業をかけてしまったんだ。しかも情報共有ができていなかったのか、それぞれ全く異なったアプローチで営業をしてしまったらしい。その顧客の信用を失ってしまった」

「はい」

「二つ目は、地域営業課が八月に地域限定のキャンペーンを打ち出したんだ。そしたら似たキャンペーンを全国規模で同時期に開催した課があったんだ。特定の地域の人には似たキャンペーンが同時に開催されたものだから混乱をしてしまった」

「はい」

「部署内の調整はどここの課の仕事だね」

「営業企画課です」

「地域キャンペーンと同時期に全国キャンペーンを開催した課はどこだね」

「営業企画課です」

「その課の課長は誰だね」

「私です」

「しっかりしてくれ」

「すみません」

「この前、営業企画課のプレゼンを見る機会があったが、ひどかったぞ。君は、課長の仕事を放棄していないか」

ぐうの音も出ない。

「頼むぞ。部下の指導も」

部長はゆっくりと去って行った。

やはり黙るなんて、無茶だった。もう仕方がない――。

頭をブンブンと横に振り、両手で頬をぴしゃりと叩いた。

だめだ、だめだ。

上司の口臭で気絶していい人間なんて世の中にいない。

一人残ったオフィス。

部下から提出されたプレゼン資料を手に、自然と涙が溢れた。噛み締めた唇からは血が滴り、紙に赤いシミを作った。

漠然とそのシミを眺めていると、ちょうどその箇所にも誤字があることに気づいた。

誤字にそっと手を触れる。

部下よ。誤字自体が問題なのではない。これは、信用問題なのだ。細かいところに気づけない人間に会社や人生を預けたいなんて思わない。手元にあった赤ペンで、誤字に二重線を引き、正しい字を書き入れた。

ページをめくる。

現状の整理のページでは、十年も前のデータが使われている。社会は刻々と変化しているのだ。最新のデータを使うように、と書き入れ、URLを添えた。

ページをめくる。

提案の目的は、長く要領を得ない。三つのポイントにまとめよ、と書き入れる。

また、めくる。

導入事例は、事例数が不十分だ。会社にある資料をひっくり返し、資料のコピーを添えた。

いつの間にか、プレゼン資料は真っ赤に染まっていた。依然、デスクには未確認の書類が高く積まれている。

日付変更線はもう越えている。もうどうにでもなれ、という思いで、資料全てに目を通し、赤ペンでびっしりと書き入れた。ふと一つの書類が目にとまる。

「これは面白いアイデアだ。論理性を補完すれば、法人向けの良い新サービスになるぞ」

起案者の欄に目を落とす。高橋。失神した部下じゃないか。

目が覚めると、オフィス内は朝の優しい日差しで満たされていた。

デスクに積まれた書類の山は、爽やかな朝のオフィスには不釣り合いな禍々しいオーラを放っていた。

こんなものを渡されたら、気持ち悪いよな――。

だが、いつまでもデスクに積んでおくわけにはいかない。決心し、添削したプレゼン資料を部下に渡した。部下は目を瞪り、眉をひそめた。

「わっ、これ」

ああ、やっぱり。

「え、え、こんな」

頭の中で、ぎゅんっという声が響く。

「こんなに丁寧に目を通してくれたんですか。ありがとうございます」

えっ。部下は目を輝かせ、こちらをまっすぐに見ている。

「気持ち悪く、ないのか。こんな真っ赤に染まった資料」

「何を言っているんですか。これだけ真剣になって、僕の資料を見てくれたってことですよね。嬉しいに決まっているじゃないですか。指摘された箇所、すぐに修正しますね」

部下が颯爽と自身のデスクに向かっていく。途中、言い忘れたことがあったのか、引き返して来る。

部下は、一つ気になったんですけど、と言って資料を指さした。

「ここの赤茶色のシミはなんですか。気になっちゃって」

「ああ、これは俺の血だ。悔しくて、唇を噛んだときに出血したんだ」

部下は、ぎゅんっと、白目を剥いた。

その晩、私は布団の中で部下のことを考えていた。高橋には次にあのプロジェクトを任せよう。パートナーには山崎がいいか。彼らがうまく補完し合えば、きっとプロジェクトを成功に導いてくれる筈だ。

それにしても、口の中がやけに磯臭い。私は、何度も何度も歯磨きをした。

「課長、課長。呼ばれていますよ。壇上へ。大丈夫ですか」

「大丈夫、大丈夫」と手を振る。

「営業企画課発案の新サービスが大ヒット。営業成績、過去最高。社長直々の表彰。こんなめでたい日に、しっかりしてくださいよ」

ふらふらになりながらも壇上に辿り着く。社長はそんな私を満面の笑みで迎えた。

社長自ら表彰状を高らかに読み上げる。私の名前の読み方が分からなかったのか、「なんて読むの？」と秘書に確認をした。読み終わると、社長は手を差し出し、快活に言った。

「私はずっと営業企画課に期待をしていた。いや、正確に言えば君個人に期待をしていた。君なら必ずや、この会社を引っ張っていく存在になると——」

ぎゅんっ。私は、あまりの臭さに気絶した。